日本現代文學全集 8

齋藤緑雨
石橋忍月
高山樗牛 集
内田魯庵

編集＝伊藤 整・亀井勝一郎・中村光夫・平野 謙・山本健吉

講談社

日本現代文學全集
8

齋藤綠雨・石橋忍月
高山樗牛・內田魯庵 集

編集
伊藤整
龜井勝一郎
中村光夫
平野謙
山本健吉

初版 第1刷
昭和42年11月19日
增補改訂版 第1刷
昭和55年5月26日

著者
齋藤綠雨
石橋忍月
高山樗牛
內田魯庵

裝幀 蟹江征治

發行者 野間省一

發行所 株式會社 講談社
東京都文京區音羽2-12-21
郵便番號 112
電話東京03 (945) 1111(大代表)
振替 東京 8-3930

印刷 多田印刷株式會社
製本 大製株式會社

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします
Printed in Japan

0395-106084-2253 (1)

(文1)

齋藤綠雨集　目次

卷頭寫眞
筆蹟

油地獄……七
かくれんぼ……二七
門三味線……三三
わたし舟……五〇

小說八宗……五三
正直正太夫死す……五四
おぼえ帳……五五
ひかへ帳……七七
眼前口頭……一〇〇
青眼白頭……一一一

作品解說……稻垣達郎　四一三
齋藤綠雨入門……瀨沼茂樹　四一八
年譜……四二七
參考文獻……四四三

石橋忍月集　目次

卷頭寫眞
筆　蹟

蓮の露……二五
惟任日向守……二四八
まだ櫻咲かぬ故にや……二六四
妹と脊鏡を讀む……一六七
浮雲の褒貶……一七三
浮雲第二篇の褒貶……一七六
夏木立……一八三
新著百種の「色懺悔」……一八四
篁村氏の「むら竹」第一卷……一八六
新著百種第五號風流佛……一八七
新著百種第六號殘菊……一八九
舞　姫……一九〇
墨染櫻……一九三
葉末集……一九四
一口劍に對する予の意見……一九六
うたかたの記……一九九
鷗外の幽玄論に答ふる書……二〇一
新著百種第十二號文づかひ……二〇三
鷗外漁史に答ふ……二〇五
再び鷗外漁史に答ふ……二〇六
三たび鷗外漁史に答ふ……二〇七
作品解說……稻垣達郎　四一三
石橋忍月入門……瀨沼茂樹　四一八
年　譜……四三一
參考文獻……四四四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

高山樗牛集　目次

卷頭寫眞
筆　蹟

瀧口入道……二一
人生終に奈何……二四二
一葉女史の「たけくらべ」を讀みて……二四三
わがそでの記……二四四
明治の小說……二五〇
月夜の美感に就いて……二六八
文明批評家としての文學者……二七四
平家雜感……二八一
美的生活を論ず……二八六
日蓮上人とは如何なる人ぞ……二九一

作品解說……稻垣達郎　四一三
高山樗牛入門……瀨沼茂樹　四一八
年　譜……四三五
參考文獻……四四五

內田魯庵集　目次

卷頭寫眞
筆　蹟

くれの廿八日……三〇一
文學一斑……三八〇

作品解說……稻垣達郎　四一二
內田魯庵入門……瀨沼茂樹　四一八
年　譜……四三九
參考文獻……四四六

齋藤緑雨集

大きいから、ちょっと論文

なんか、神様っていう

の中の、何かを、ちょっと

なんか、ちょっと、ちょっと

油地獄

（一）

大丈夫當さに雄飛すべしと、入らざる智慧を趙温に附けられたおかげには、鋤だの鍬だの見るも賤しい心地がせられ、水盃をも仕兼ねない父母の手許を離れて、玉でもないものを東京へ琢磨きに出た當座は、定めて氣に食はぬ五大洲を改造するぐらゐの畫策もあつたらうが、一年が二年二年が三年と馴れるに隨つて、金から吹起る都の腐れ風に日向臭い横顔を漸々かすられ、書籍御預り申候の看板が目につく程となつては、得てあの里の儀式的文通の下に雌伏し、果斷は眞正の知識と、着て居る布子の裏を剝いで、其夜の鍋の不足を補はれるとは、今初まつたでもないが困つた始末、唯だ感心なのはあの男と、永年の勤勞が位を進め、お名前を聞さへが堅くるしい同郷出身の何がし殿が、緣も無いに力瘤を入れて褒そやしたは、本郷龍岡町の下宿屋秋元の二階を、登つて左りへ突當りの六疊敷を天地とする、ことし廿一の修行盛り、夙起を屢〻宿の主に賞揚された、目賀田貞之進といふ男だ。

貞之進の志ざす所は法學にあるが、もと〳〵口數の寡い、俗に謂ふ沈默の方で、偶ま學友と會することがあつても、爾だ爾でないと極めて簡短な語を以て、同意不同意を表白するだけで、敢て太だしく論議したことはない、だから平生に於ても、敵といふ者を持たない代りに味方といふ者も亦持たない、つまり親密な友達と云つては、貞之進に限つてひとりも無いのだ。生れを問へば、山は赤石山、川は千限川、地理書ではひけを取らぬ信濃國植科郡松代から、最う一足田舍の西條といふ所で、富豪と朴直と慈仁と、この三つに隣村迄の小作の指を折られる目賀田庄右衞門が一粒種、一昨年はまだ長野の學校に居たが、父に連れられて東京に來り、それより踏留まつて今の秋元へ龍は潜んだのだ。されば學資はありあまる、書は自由に買ひ込む、それで讀む讀まぬに拘らず机の前を離れたことがないので、目賀田は遂に字引になるのだとの評が、同窓の學友の口から往々漏れることがあつた。

今の貞之進に、嗜好を何だと尋ねたならば、多分讀書と答へるだらう、だが不思議なことは、寄席へ行けと云へば寄席へ行く、芝居へ行けと云へば芝居へ行く、それで何處にも面白いといふ氣振は見えぬが、誘ひかけられたことは必ず辭さない、或ひは辭する勇氣が無いのかも知れない。同宿の惡太郎原は、それを好事にして折々貞之進をせびる、せびられゝば直ぐ首肯て、及ぶだけ用立てゝ遣るのが例の如く成て居た、それから或男が附け込んで、或いやしい問題を提げた時、貞之進はぢつと其男の顏を瞻詰めて、頻りに唇を顫はして居たが、大喝一聲、何ッと言放した音の鋭かつたことは、其れ迄に顯はれた貞之進の性行を、悉く打ち消す程の勢ひであつたと、却つて惡太郎原の間に、興ある咄の一つとして傳へられた。其うめ合せには是迄秋元の婢共は、貞之進の物數を言はぬことを、氣心が知れぬと內實忌んで居たが、其の頃から單に溫和い方と言改めて、羽織の襟の返らないのを、呼留て知らせて呉れるやうになつた。

窓の障子をがらりと開ければ、日に醉つた桃の花が、隣りの庭から赤い顏で覗き込んで居るを、こちらからも覗き返し、急に何か思ひついて筆立の中を搔廻して居る時、湯に行くより外導を取つたことのない小女が駈けて來て、はがきが參りましたと云ふのを何處からと取上げて見れば、來る何日午後三時より鳴鳳樓に於て、在京長野縣人の春季懇親會を開くとの通知であつた。貞之進は去年から

其都度通知を受けたが、まだ一度も出席したことがない。尤もそれが嫌だといふのではなく、出京後日數が淺いので兎角馴染がない、馴染がないから交際會へ出べきだとは知つても、何となく氣おくれがするやうで、それで今迄不參で了つて居たのだ。今歳は上田の人松本の人飯田の人、三五人の知己を得たので、これを賴みに是非出席しやうとおもひ、今朝新聞の廣告を見て、會の開かれることを既に承知して居た所へ、今又はがきが屆いたので、貞之進は直ぐさま筆を執つて出席の由を幹事へ宛てゝ申入れた。

やがて其日が來た、幸ひ天氣も好し、開會は遲れ勝と豫て聞いて居たが、なぜか今日は氣が急くやうで、ちと早いと思つたが寄路するつもりで、二時と云ふに徐々支度を始めた。流石豪富の伜と云はれるだけ、衣服のたしなみもあるのかして、上着は宿の内儀に持が能いと勸められた茶縞の伏絲、下着は紬かと思はれる鼠縞、羽織は黑の奉書にお里の知れた酸漿の三所紋、何ういふ筈か白足袋に穿かへ、机の上へ出しそろへて置いた財囊手巾卷烟草入を、袂なりふところなりにそれ〴〵分配し、戸棚の裡に隱されて居た黑の方の帽子を手に持つて、早足に二階を駈下り、格子を出てから復た立戻つて、賴みますと宿へ聲を懸け、それで東京へ來て初めて、寧ろ生れて初めて、樓といふ字の附く大割烹店へ出向いて行つた。

（二）

鳴鳳樓といふのは、大川に臨んで建てられた高名の割烹店と云ふよりは集會席で、長野の懇親會はいつも此家で開かれると極つて居た。貞之進は門内へ曳込まうとする車を兩三歩手前で下り、賃錢を拂つた序に會費と名刺とを取出して一緒に握み、それを玄關口に立つて居た幹事に渡して、貴客こちらですと樓婢に案内されて二階へあがれば、成程、三時は今途中で聞いたのに、來會者は僅々三四十人に過ぎない。

黑天鵞絨の薄い小形の不斷使ひの座蒲團が順好く幷んで、其間に煙草盆が、五歩に一樓十歩に一閣といふ鹽梅式に置かれてある。されどまだ坐を定めた者はなく、向つて右側のまんなか所の、杉を磨いた丸柱の前に團まつて、移廳論の影辨慶が、南部だとか北部だとか、鮭の鑑定でもないことを云つて居るのがあれば、其後を環る椽の欄干に凭れかゝつて、萬治以來話でも位置の知れた兩國橋を、彼處ですなと新しさうに指さして居るのもある。貞之進はきまりの惡いのを隱さうがために却てきまりが惡く、座敷へも這入ず椽へも出ず、敷居の邊をうろついて居たが、今方這入て來た代言とでも云たい洋服の若紳士が、無紋の黑八丈の羽織を着た商人風の老紳士と出會つて、輕く挨拶して行去らうとしたが、老紳士が頭を擧げないので復下げると同時に老紳士が頭を擧げ、若紳士が未擧ないことと思つておのれも復た下げて居るのを、奇觀々々これをお辭誼交際と名けると、遠くで見て可笑がつて居た藍縞の一重袴を穿いた男が、圖に乘過ぎて何さんとか呼れて振返る途端に、明けかけの障子の親骨へ、したゝか頭を打つけたのも亦奇觀であつた。太平記で云へば、これを戰の手始めとして、追々參着した會員の百餘名と註せられた時、そろ〳〵膳部を運び出されたので、貞之進も恐々末席へ就いたが、あとで思ふと餘り末席過ぎて兩隣りが明いて居るため、却て誰の目にも附くやうで我ながら鈍ましい、是れにしても知己のひとりでも來ればと、そつと席上を見廻すに、其人々はいつの間にか來て遙の上席に傲然とかまへて居るので、貞之進はいよ〳〵心細く、斯う成つてからの助けは、途中で買足して來た紙卷烟草の煙ばかりだ。

餘興とゝなへて伯圓の講談が了り、小さんの落語が半ばに至つた時、春の日は暮懸つての命が長く、水を隔てゝ御藏橋を駈下りる車に未提灯は點いて居なかつたが、座敷には既燭臺の花が咲いて、それから里朝の曲彈も首尾克く相濟んだ跡は、お定まりの大小藝妓の受持となつて、杯酒潮を湧すと昔は大束に言つて退たが、まこと逆上返る賑ひで、やがて附けて仕舞はうかと云つて藝妓が三絃を執つた時から、一層激しい笑ひ聲が聞えた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

貞之進は元來酒を多く呑まない、吸物椀へ一寸口をつけただけで唯腕組して居たが、幸ひ遲參者が加はつて、左右とも塞がつたので、すこしく心丈夫に思つた。右隣の席へ就いたうすら髯のある男は、來る早々促し〳〵あほりかけて、氣斗牛を貫くといふ勢ひ、其上膳の物を退治することも頗る神速だ。君一つと其男にさゝれて貞之進は餘儀なく受けたが、其男がお酌と呼んだ聲の下から、通懸りの薄色縮緬がハイと酌いで呉れるを、貞之進は頻りに顫へて其儘猪口を膳の端に置き、手巾で手を拭いてながめて居たが、それで腹の中はすでに醉つたやうな心持だ。

酒に寛ぐのが懇親會の趣意なら、席の亂れた時が興の登つた時で、歌ふのもある、踊るのもある、あの男がと思ふやうなのが斯う云ふ時に落を取つて、それでも「花の曇り」を知て居たぜと、後日何かの折の紀念となるのだ。貞之進はぐつと一思ひに猪口をあけて、隣の男へ返さうとしたが、生憎向ふむいて一心に談話を仕て居るので、何と云て呼んでいゝか分らない、丁度其時向ふ側の上の方で、前づらの少し禿た男が御返盃と云たのが耳に入り如何さま彼の通り遣るのだとは思つたが、何うしたことか聲が旨く出て來ない、出て來ないのではない出て呉れない、仕方がなく一度膳へ戻して、默つて再び出した猪口へ相手の肱が當つて、初めて氣が附いてヤ失敬と受てくれたので貞之進は漸つと安心した。けれども酌する者が居ない、自分が手を出すことは知て居たが矢つ張其手が出兼ねて躊躇つて居ると、先隣りから手が出て銚子を取かけた處へ、おや恐れ入りますと云つて坐つた藝妓がある。貞之進は重ね〳〵の不首尾を他は知らぬが自分が咎めて、最う些と早く此藝妓が來てくれゝばと、縮くみながら不圖見るに、歳は十七八細面の色白、餘は貞之進に見えて見えなかつたが、其時まだ「出」の姿で居たといへば、水車の鋸模樣を二枚重ねて、帶は吾妻錦、襦袢は緋の紋壁にしほぜの白半襟、藝子髷に金の竹輪を掛け、花笄に平打の銀簪、櫛は白鼈甲の利休形、ひんの好い一方のつくりで、今燭の映つたは萌黄に金の龍眼の紐鎖、どう見ても此會が約束の品ではなく、會員中の外飾好が特に召連て來たものと思はれた。

（三）

緣が不思議のものなら、ほれるは一層不思議だ。今の小説家は、ほれたりほれられたりの爲めに、鼻筋が通つて口元が締つて、眼に夥だしい愛嬌を有するといふ器用な女をつくり上げるが、ほれるは必ず美にほれるのではない、ほれられた其者が卽ち美になるのだ。世間では、ちよいと見てちよいと惚れると云て可笑がるけれども、畢竟ちよいと惚れるのが後に能くほれるので、其初めはちよいとゝ云ふより外に指す所がない、萬一あの眼元にほれたとか口元にほれたとか、乃至鼻筋にほれたとか〻最初から知れて居れば、其ほれたのは僞はりだ、何故となれば、生れて缺點の全く無い者はない筈だから、ほれる程の不思議が起る時に、何處が好と明らかに指すことが出來れば、何處が醜いといふことも亦明らかに指すことが出來る、已に醜い所を指すことが出來ればそれでもほれると云ふ理は無い。貞之進は我膳の前へ斜に坐つた藝妓が、ほんのりと强られて醉つた頰におしろいの匂ふのを、何の氣もなく見ると向ふからも不圖見たので、周章てゝ顏を背けて後の障子へ憑かゝつたが、直ぐと復た見たくなつてそれとなく見るに、自分が向ふを見ながら向ふが見るやうで自分が恥かしく、目も鼻も口も唯何だか好い女におもはれて、それより上の考へも又た下の考へも出なかつたが、程經つて此の藝妓の名を何と云ふかと知りたくなつた。

彼の右隣の男は、今や十二分に酩酊で、オイと云て猪口を其藝妓に獻し、お前の名は何と云ふ、名札を呉れ名札をと、同じことを二つ重ねて問懸けた。名札はありませんと其藝妓はすげなく答へたが、やがて帶の間を探つて名札だけ取出し、上げませうか、おゝ呉れと二度言はせて渡したのを、彼男は眼を皺めて見て、それぢやア歌ちやんかと云て、あはゝアと面白くもないことを聲高に獨り笑つ

て居た。名を知りたいと思つた貞之進は歌ちやんとだけ分りは分つたが、藝妓の名はそれでは分らない、歌吉か歌助か小歌か歌子か但しは其儘のお歌か、つひ一言尋ねたくも仲々口は開かない、其時歌ちやんと云れた藝妓は貞之進の方を向いて、貴客にも上ませうかと云たこそ幸ひ、飛附たい程貰ひたかつたがそれも手が出ない。彼男は一旦決へ取込んだ名札を再び出して見て、何だ柳橋だ家名が無いと疑はしさうに云ふを、おや爾ですかと藝妓は一寸覗き込んで、弘めの時の殘りですもの、儂は名札は嫌ひと云たのから見れば、一本に成て未間のない歌ちやんなることが知られた。彼男は能々の穿鑿家と見え、それぢや家名は何だと推返すと、知ませんよと藝妓は冷かに受けて銚子を取り、お酌〳〵と突附たが彼男が名札を下へ置ぬので、くどいのね貴客は、梅乃家ですよサアお酌と、同一時間に二種の事業を遣り遂げる、彼男は漸く滿足して猪口を取つた。名札を呉れろの家名は何だのと根掘り葉掘りするは、二度と來ない客か、來ても自腹を切らない客だと或老妓の言つたのは、この男の容子から考へて、宜べ經驗のあることと信じられた。然れども悦ぶべし其名札は、江戸三界を持廻られて、息災延命のお札より難有いに相違無い。

貞之進は始終耳を欹てゝ居たが、遂に思ふ名を聽得なかつたので、平日ならば男兒が塵芥ともせぬ程のことが膽を落し、張合なげに卷煙草を吸附て居ると、其藝妓は此方向きに居坐り直つて、貴客一本頂戴なと云つて、無論許されるのではあるけれども、未許しの出ない内に既に早く手を着けたを、彼の右隣りの男は、こゝにもあると自分のを投與へたが、藝妓は矢つ張貞之進のを取つて、これが善いのですよと煙草の珍しい方を取つた積りの詞が、貞之進は譯無しに嬉いやうで、人物ぐるみ密と藝妓の手近へ推遣つて、そして自分の顔を朱で塗つて居た。

歌ちやんと呼ぶ聲がするのを其藝妓は振返り、其處は懲々だよと口の内で云つて、こちらへおいでと頤で招いて居ると、やがて來の

は同じ年配で、御召の大縞の上着に段通織の下着、鼠緞子の帶を締め、藝子潰しに銀のあばれ綯といふ扮粧、歌ちやんまた着更ないの、でも直ぐ行く待てと云ふのだものと嫣然笑へば、爾、ひどく醉されちやつたと今來たのも亦嫣然笑つて漸く坐つた。ほんとに口駄らないよと云ふのを何だと思へば、それあの燭臺の前に居る、あゝあの服を着た方よ、好男子が居ると高ちやんが云ふから行つて見ると、眼鏡の金縁へ燭りが映つてそれで顔が光るのよ、高ちやんは直あれだと云つて、手巾を口へあてゝぢろりと貞之進を見たので、今迄歌ちやんの頸の動く通り自分の頸も動かして居た貞之進は、この時試驗に遇ふやうな心持がして、お前、見に行くから惡いのさと云た歌ちやんの詞は、まるで俯いて居る間に聞いた。それから兩女は頻りに話合つて居たが、今度は小歌々々と聲に色があるものなら、どすぐろい聲で呼ばれるにハイと長く答へ、膝の上に在つた蜀紅錦の煙草入を右手に持つたまゝ立つて行たので、貞之進は魂ひを赤の絞り放しのしよひ揚に縋らせ、ぼんやり後影を目送つて口惜いやうな氣がする間に、あとから來た段通織の下着も又た起つて行たので、櫻媚び海棠醉つた我膳の前の春は忽ち去つて、脊核狼藉骨飛び箸轉がるの秋となつた。唯すこしく貞之進の心を安んじたは、柳橋の藝妓梅乃家の小歌と、今の呼聲に由つて初めて承知されたことだ。

其前貞之進は知己なる飯田の人といふのに挨拶を仕たくつて居たが、其時其人が丁度座敷を出るのを認けたから、若しや歸るのかと思つて奮つて起つて其人の跡を逐ひ、例の沈默と云れる調子を以て、きれ〳〵と怪い挨拶を施し、別れて此方へ來懸つたが、序にと二階を下て用達に行くと、手を洗ふ後ろに立て居たのは、料らずりき歌ちやん卽ち小歌で、この多勢の宴會に一々お附申すのではなけれど、出會つたまゝ先刻顔を覺えた客だと思へば其處が商賣で、貴客これをと白茶地に紋形のある手巾を出したのを、貞之進はそれが取にくいよりは取ていゝか惡いかゞ分らないで、自分の袂から惜

氣のない白半巾を出さうとするのを、あら儂のではお厭なの、何うせねと推附るやうにして渡した時、何とも云へぬ香氣が鼻から眼へかけて貞之進は先眩いた。座敷へ復つてもそれから何だか氣に懸るやうなことが出來て、然かも心配は毫しもないが胸さわぎがするので、烟草も沈着いて吸へずに半分で灰吹の裡へ葬つた。さうかうする内、右隣の男も見えなくなつたので、貞之進も卒歸らうと思つたが妙に引留める者がある、何が引留めるかと考へるに形が無い。心を決して玄關に到るに、恰も其時帳場の横で黑縮緬の羽織を着、鳩鼠色の紐を結んで居たのは小歌で、貞之進は何か云ひたかつたが云ふ折でもなく、又た云ふことも出來ぬので其儘下足番の所へ行つた。

鳴鳳樓の門を出ると、幸ひ一人乘の車が居たので貞之進は是れへ乘らうとする時、跡から同じく車で來て行過ぎたのは、正しく貫つて歸る小歌だ。我が乘た車も存外疾くて、程なく逐着て二三町は續いて駈けたが、夜目なれば貞之進は唯先へ行く車の主の頭だけを見て、それで何處迄も續いて駈けて居たい心持がしたが、我車の方がフイと町角を曲つたので、あつと振返たが向ふの車は最う見えない、なぜ曲つたと叱りたいにも本郷へ出る道は一筋、秋元へ歸つたのは九時近い頃であつたが、さて其夜は容易に眠られない。

（四）

其實酒飲會でも、其名懇親會であるからは、交際上顏を晒して置く必要があると感じて、貞之進は出懸けたのであつたが、さて行て見ると例の沈默では、知らぬ顏は何處迄も知らぬ顏で、彼の右隣の男に猪口をさゝれたのが、懇親といへば懇親敢て益する所はなく、寧窮屈極まるものと思つて居たが、「あら儂のではお厭なの」、嬌喉玉を轉ばすが如き此の妙音が、忽ち小歌といふ大知己を得させたので、秋元の我部屋へ歸つてからも、尙ほ鳴鳳樓の座敷に居るやうな心持で、けふ半日珍しく樂を得て居た机に片肱載せ、衣服も着更へず洋燈の蓋を瞻詰めて、それで其蓋に要があるのではなく、蓋と自分との間に變たものでもあるやうに折々にやりと笑つて、果は頭へ肱を當がつて横倒しに机へ凭れかゝり、そして肚裡で、手足がひとりでに躍り出しでもするやうであつた。今若し試みに其腹を割いたら、鬼が出るか佛が出るか、何の何の、鬼でもない佛でもない、「あら儂のではお厭なの」、それあの花笄の小歌が今日見た水車の裾模樣のまゝで出るのだ。

肌の白かつたこと髮の黑かつたこと、袖から袂から襟から裾から、悉く眼前に浮んで、其れが我膳の前へ坐つた始めから、三丁來た角で車が別れた終りまで、何遍となく何十遍となく何百遍となく、繰返し繰返し肚裡を歷環つて居る、勿論歷環る間にも一々窮理する所があるので、隣の男が投與へた烟草を棄てゝ、我烟草を取つたことを思出して見ると、彼れに冷かで我れに溫かであつたやうに考へられ、冷かなる所以溫かなる所以を我心で推測るに、何とも云へぬ氣持がして、それで「あら儂のではお厭なの」と云れた詞が、殆んど只の詞ではないやうに思はれる。でもそんなことがと一旦は自分が自分を打消したが、それは眞正に打消したのでなく、或ひはとだけで一寸打消して見たのだから、中々以て打消しの效力は無い、一度半度の馴染でゞもあれば格別それは餘儀ないとした所が、烟草一本が緣の此の貞之進に、「あら儂のではお厭なの」、あゝあれが只の詞と思へやうかと、折角向いて來た本街道を復た横へそれて、何時迄經つても同じ山の中を彷徨つて居る。

それならば、歸り際に何故默つて行過たかといふ疑問を、やがて漸とのことで拾ひ出したが、我すら口を利得ない場合に、女として初めて逢つた男に、「あら儂のではお厭なの」、これが思切つて仔細無しに出る筈はない、爾だ、屹度爾だ、行過ぎたのは多分急の用があつたのだ、いやそれにしても唯一言を咨まれることはあるまい、但しは夜目で見えなかつたか、見忘れる氣遣ひはないのだけれども、生憎車へ乘らうとして後向に成て居た時だから、それともなく

見ちがへたのだらう、慥に此貞之進と見たらば何とか云たに相違無い、證據には我れ玄關に立出た時、羽織の紐を結びながら貴客どうぞと云て跡は聞えなかつたが、何うぞといふ詞の内には、願ふといふ意味が無論籠つて居る、どうぞ願ふ、何を此の貞之進に願ふのか、再た來てくれは彼れが商賣の詞なら特に我れのみに限らない、それを我れのみに限つて「あら儂のではお厭なの」、あの何うぞも亦記憶すべき何うぞだと、斯思定めて四邊を見ると、こゝ六疊の一間は、何も彼も小歌の顏で埋つて居るやうだ。

暫くして貞之進は思ひ返したやうに、儼然と口をむすんで、馬鹿ツと自ら叱つて袂の物を片附け樣としたが、何事ぞ一番に手に觸れたは手巾で、是れだ〳〵これを出さうとする時、「あら儂のではお厭なの」、厭ではなかつたが取おくれて躊躇つて居ると、推附て渡して呉れるに手が觸つて、あゝ手が觸つてと思ふと、あり〳〵其手が今も觸るやうで、むすんだ口は眼と平行にほどけて仕舞つた。何うかして忘れたいにも忘れられない、忘れるは寢ることとそれから唐更紗の夜の物を展べたが、其の時二階の下で小歌らしい聲がするので、ヤと貞之進は耳を立てゝ能く聽くと、似ても似つかぬ宿の小女が、例ものハシヤギ聲で笑つて居るのだ。何であれを聞ちがへたか、馬鹿ツ馬鹿ツと復みづから叱つて衣服を着更へ、二階を下りて手水に行けば、手を洗ふ背後に小歌が立つて居るやうで、「あら儂のではお厭なの」、と何處からとなく耳に入るので、ぐるりと貞之進が體を廻すと、其小歌かと思つたのも亦ぐるりと廻つた。

枕に就きは就いたが眠られない、眠られないとゝもに忘れられない、仰向いて見る天井に小歌が嫣然笑つて居るので、これではならぬと右へ寢返れば障子にも小歌、左へ寢返れば紙門にも小歌、鴨居にも敷居にも壁にも疊にも水車の裾模樣が附いて居るので、貞之進は瞼を堅く閉ぢて、寢附かう寢附かうとあせる程猶ほ小歌が見える。これがあるからと洋燈を吹消たが、それでも暗闇の中に小歌の姿が現はれて、「あら儂のではお厭なの」、の聲がする。術策盡きて夜着を頭からスツポリ被つたが矢つ張いけない、起きて居た時よりは一層激しく肚裡に跳る者があつて、或ひは急に或ひは緩に、遠慮なく驅け廻る。其内目はいよ〳〵さえて來て、不圖小歌の年齡に考へ及ぼし、いつの間にか自分と夫婦になつて、癡話もする苦說もする小鍋立もする合乘もする、恐い事恥しい事嬉しい事哀しい事面白い事可笑い事、腹一杯遣つて退けたと思ふと元の鳴鳳樓の座敷へ還り、「あら儂のではお厭なの」のお溫習が復た始まる。

漸く疲勞れて寢附いた貞之進は、いつも上二小間の筈の窓の障子へ一面日の當つた頃目を覺し、周章てゝ起きて筆立に入てあつた楊子を取り、急はしく使ひかけたのが漸々緩くなつて、其手が動かない程に見えた時は又思ひ出した時で、目賀田さん直ぐ御飯をあがりますかと、隣の室の入口あたり迄來て尋ねる小女に促され、應と云て部屋を出た其處の柱に、四面楚歌聲と誰かゞ落書したのが目に這入り楚歌の歌の字が殊に大きく見えて、何とも知れず頭に響く者があると同時に、其柱が藝子髷に花笄を挿し、それが小歌のやうで虞氏のやうで、二階を下りるのが自分のやうで項羽のやうで、顏を洗ひ濟して部屋へ戻り、出校の時刻と急いで箸を取つたが、膳から考へて向ふを見ると、又何だか坐つて居るやうだ。

(五)

それからの貞之進といふものは、明けても小歌暮れても小歌、日として夜として、小歌の姿が眼に映らぬことはなく、學校の往歸りにも小歌が送迎ひをするやうで、間がな隙がな忘れたことがない。今迄二時間で濟んだ下讀も、一字一句小歌の笑顏が附て廻つて、五枚のものを二枚目で一ぷく吸た烟の裡に、朦朧と水車の裾模樣が現はれ、續いて鳴鳳樓の座敷の始終が復たおもひ出されて、つひ四時間かゝつても滿足には出來なかつた、そして國元へ遣る見舞の狀を書かけ、消しの出來たのを引裂いて二度の文言を案じる間に、同じく不思議が胸に浮んで、其消した紙へ、楷書行書艸書片假名平假

名、何だか矢鱈に書つゞけて、裏表とも眞黑になツたのを丸めて投捨てた時、小歌といふ二字に限つての走り書が、自分で見て大いに上達して居た。

何うあつても最う一度逢たい、是非逢ないでは居られない、それには良家の處女とちがつて、容易に簡便に、金で逢はれるとは知つたが、それで其金がどれ程要るかゞ氣に懸つて、金はあるとした所で、嘗て長野の學舎に在つた日、夏夜舟行の記に、杜康を命じ蘇小を聘しと古い所を剽窃た覺えはあつても、今となつて藝妓を呼ぶ手續が分らない、ほかでもないことを友達に聞うにも聞れず、聞たとて差支へるではないが、公園の薄茶一碗突合はずに居た目賀田貞之進が、愚直と斥けられた今に及んで、縱令自分が藝妓を呼たいためと言ないまでも、聞くさへが畢生の恥辱のやうに思はれ、何うしたら宜かといふことが、小歌を思ふが故に小歌を思ふより一層切であつた。宿を出て近邊を散歩するに、若い男若い女が手を牽合つて歩いて行くのを見るごとに、羨ましいやうな妬ましいやうな、蔑むやうな侮るやうな、名狀のならぬ心持が自分に起り、傍らの古本舗を覗き込むと、色男の祕訣と題した書が不圖目に留り、表紙に細々と載てある目錄を、見るやうに見ぬやうに、寧ろ見ぬやうに見ぬやうに、横目で讀むに其初めが娼妓買の祕訣藝妓買の祕訣、貞之進は我知らず飛立つたが氣が附て隣の文集やら詩集やらをもとめるふりで、窃と正札をうかゞへば金十錢、これで藝妓買の祕訣を得ることならば、いや〳〵祕訣には至らないでも手續だけ分ることなら、安い物だがと本屋の顏を見るに、ぎよろツとした眼が此方を嘲るやうなので、明らさまな色男の祕訣とあるものを、のめ〳〵と買ひもしかたく、買ふは一旦の恥買へば永代の重寶、買ふべし〳〵と頻りに肚では促すものゝ手は出せない、去るにも去りかねて暫らく佇んで居たが、見た上は欲いが愈ゝ急で、他の素見が立去つたを幸ひ十錢銀を投り出し、これをと云ふと本屋は彼の眼で見て、祕訣ですかと問返した音に猶ほ嘲りの分子が含まれて居るやうで貞之進はぎよツとして爾だとの一言が出ず、誰れも知らぬことに顏赭らめ、イヤこれだと其下にあつた樺色の表紙を、あわてゝ何の書とも知らず指さすと、本屋は難有うと云つて、二錢の剩錢と其書とを取て渡した。貞之進は倉皇に立出たが其本に用があるのではなく、二三丁來てから西洋小間物屋の玻璃戸を漏る燈影に透し視れば、三世相解萬寶大雜書とあるので、自分ながらチエツと舌打して、なぜ祕訣の方が取れなかつたか、取代へて來やうかと二足三足戻りかけたが戻りきれずに、つまらぬことに八錢失つたをくやんで、殆々自分が勇氣のないのを歎じた。

宿へ歸つて三世相解を懷ろから出したが、其邊へは置けず捨てゝも遣られず、机の抽斗の奥の方へ突込んで、それでまだ祕訣が欲しく、宿の小女に買に遣らうかと思つたが、すれば本屋に買主の顏は知られぬが、宿に知られるが何よりの不都合と、貞之進は獨りむしやくしやとして、洋燈の心を出したり引込めたりして居る内、圖らず思當つたことのあるやうに點頭いて手を敲き、飛んで來た小女にお神さんはと聞けば、居りますと云ふ、お茶を煎れるからお入來と云て呉れと命じたは、秋元の女房が其昔茶屋奉公したことのある、豫て小耳に挾んで居たので、三世相解の埋合せに、今買て來た藤村の最中から漕附ける、貞之進に取ては非常の大計畫が產出されたのだ。

（六）

百花園の秋草を見に行つた土產に、言問の團子を買て來て呉れたことはあつたが、つひぞ是迄已むを得ぬ用事の外、冗談口一つ云たことのない貞之進が、態ゝお神さんにとのことに小女も不審を立て、寢る迄の時間つなぎに、亭主が不斷着の裾直しに懸つて居た秋元の女房は、黑の太利とかいふ袢纏の、袖口の毛繻子に褐色の霞が來て居るのを、商賣柄外見無しに引被け、轉宿でもなさりたいのかと、膝の上の絲屑を丸めながら二階へ登つて、貞之進の部屋の前ま

で行けば、お這入り〳〵と何日にない愛素しいに、女房は勝手が違つたやうで却て恐縮し、御用はと恭〻敷すべり込めば、いや用ではない茶を前れたからと、此人を見知つて以來、三年越し例しのない調子の輕さ、目賀田さま茶菓を賜はると、秋元の年代記へ特書せねばならぬ程の不思議に、女房は心裡で倍々疑つて居たが、饒舌るを以て達辯とする隣室の五島に比べれば、口數は三分一にも足らぬが、沈默家と評判の貞之進に似合ずぽつり〳〵と今夜に限つて四方八面の浮世の沙汰、女房は隔意のある中にも解けて、いつか話が一昨日の鳴鳳樓の懇親會に及んだ時、東京は藝妓が澤山な所だと貞之進が誘ひかけたを、遊ぶ者も多い遊ばれる者も多い、其處が都ですと女房は何の氣もなく釣込まれ、それでは先日の會は柳橋の連中で御在ましたか、貴君はあの方にはお氣をお留なさいませぬがと云つて、袋のまゝ置てある最中を一つ取て半分に破り、ほんとに貴客には亭主でも感心致して居りますと、こぼれた粉を拂つて居るに、それが貞之進の胸に徹つて、顏を見られでもするやうに自然に背けた。

けれど其れは自分が咎めたまでゞ、他の知る筈がないので復た許し、今も先づ柳橋が一かと云へば、此人にない異な穿鑿と女房は貞之進の顏を看上げたが、これに答へるよりも我が見聞の廣いのを誇るのが先で、いえ今では柳橋も寂れました、おきんおえいに榮えてそれから二十年といふもの、わるくなつたとは言ふ條一昨年迄はと詞杜絕れ、丁度私共が兩國近邊に居りました頃は、まだ〳〵話の種も出來ましたが、今では頓と指折ることも御在ません、世のいゝ時には一旦落籍んでも直再勤たものですが、當節のやうに世が惡くつては、藝妓もたいていではないので、落籍んだとしたら容易に出ません、貴君景氣が宜くつて御覽じろ、老先長い體を端た金に縛られて、見たくでもない旦那の御機嫌を取て居ますものか、譯を知らない新聞屋が、全盛だとか目出度いとか云ますが、落籍の多いのは決して景氣のいゝのでは御在ません、寧不景氣の現象ですと、茶屋奉公の昔から、胸間に鬱積した金玉の名論を洪水の如く噴出されて、貞之進は爾か〳〵と唯點頭いて居たが、それでも小歌といふ好兒が御在ますと、たつた一言其間へ加へて欲かつた。

赤縞の二子の前垂を膝の下で引張つて、そして右の手で其膝の上をなでゝ居るのが此女房の癖で、圖に乘て辯じ附けられたけれども、貞之進はまだ要領を得ない、最う一轉すればと思つて、何ういふ人が重に遊ぶのかと問懸けると、それはと女房は角火鉢の緣へ飛んだ唾を指の先で消し、土地々々で藝妓の風俗もちがへば、客の風俗もちがひますから、何ういふ人と限ることは出來ませんが、遊びと云へば元々奢りですから、金を吝むなら奢らぬが宜のですが、兎角このごろは安く遊ぶことばかりを心掛け、二階へあがれば直にお神さんに御用のある客が多いのですもの、藝妓に意氣地が無いと云ますがそれは客の罪で、よしんば意氣地が出したくつても、其意氣地を買て呉れる客がないのですから、出ないのは當り前ですと、それから順を逐て、揚代の事纏頭の事箱丁の事女中の事、料理屋の事待合の事船宿の事、悉とく說明らめた揚句、遊ぶなら金を遣ふこと、遣はぬなら遊ばぬこと、遊ばずに濟めば遊ばぬが宜のです、およしなさいよと云て、自分で酌いだ茶碗を取つた。貞之進は計略圖にあたつて、おのづから答へを得たので頗る滿足し、早く斯うと心が附いたら、三世相解に辛苦することもなかつたと、漸く氣が勇んで、おやすみなさいと下て行く女房に、階下の衆へと云て最中の袋を、報酬でもあるまいが其儘投げ與へた。

其夜貞之進は枕に就いて、依然藝子髷に花笄を夢みたが、すこしく前夜と趣きが異はつて、紙障襖は鳴鳳樓に似て居るやうで、それで鳴鳳樓ではない六疊許の小座敷に、小歌と自分と差向ひで、やがて小歌が自分の膝へ凭れたと思ふと、忽ち其顏が秋元の女房になつて、こんな物を貴客に頂くのではありませんよと云て投返した祝儀包が、見る間に今日學校でなやんだ法理何とかの、第百十一頁の所と變じ、拾ひ上げて讀んで見ると、藝妓買の祕訣と書いてある。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com